

見学会で見た農村舞台の「顔」

九月五日、私にとって農村舞台見学会初参加の日。見学会で訪れたことが拝宮農村舞台の復活公演につながったというお話をうかがい、そんな可能性を秘めた舞台の姿を見てみたいし取材してみたいと思つての参加でした。

実は、イベントのない日に農村舞台に行くのはこの日が初めてでした。今まで私が農村舞台を訪れたのは「阿波人形浄瑠璃ねっと」というインターネットサイトに掲載する動画取材のため。取材は公演のある日を選んで行うので、私は農村舞台のことを「大勢の人が集まり人形浄瑠璃の公演に大喝采が起ころ、にぎやかで明るい場所」として捉えていたような気がします。だから、「意表を突かれた（もちろんいい意味で）」というのがこの日の最初の目的地である日吉神社の農村舞台に到着したときの正直な感想です。イベントがない農村舞台はとても静かで、自然の音がたくさん聞こえました。今までの取材時に感じた雰囲気「動」ならば、今回は完全に「静」。ロケーションの素晴らしさを目いっぱい感じます。思えば私が取材時に感じていた「動」なる雰囲気は舞台そのものが持つものではなく、舞台を支える人たちが公演を楽しみに来られた人たちが発するマンパワーでした。舞台の「静」と集まった人たちの「動」。そのふたつが一緒になってこそ農村舞台公演の大きな魅力が生まれているんだと、今さらながら感じました。それからもうひとつ、実はふすま絵を生で見たのもこの日が初めてでした。川

俣農村舞台では、ひとつずつ並べられていくふすま絵や、ジャンベの音に合わせず少しずつ絵が変わっていくカラクリには本当に感嘆しました。テレビや写真では見たことがあつたけれど、こんなに鮮やかなものだったとは。先人の業には恐れ入るばかりです。また、川俣農村舞台の持つ自然の美しさも素晴らしいと思います。大きな木々と濃い緑に包まれるような舞台です。この川俣農村舞台は平成三年に人形浄瑠璃の公演を行ったそうですが、それを見逃してしまつた私としては、ぜひここで公演を見てみたいと思つました。

さて、初めに少し触れましたが、私は「阿波人形浄瑠璃ねっと」(<http://www.jorin.net>)というインターネットサイトを運営しています。人形浄瑠璃に関するイベント情報やトピックスを扱っているサイトです。私がつとも人形浄瑠璃に興味があつたのかというところはそうではなく、この仕事を始めるまではほとんど知識がありませんでした。農村舞台のこともわかり、でも、いつしか人形浄瑠璃や農村舞台、それを支える人たちの姿を追うことが楽しくなりました。人形浄瑠璃は誇れる素晴らしい文化だし、農村舞台は多くの可能性を持っていると思います。小劇場であり、野外ライブステージであり、人が大勢集まる広場でもあるこの舞台をどんな風にも利用できるか、考えるとわくわくしてきます。とりあえず今私ができることは、「阿波人形浄瑠璃ねっと」を通して、こんな

阿波人形浄瑠璃ねっと 松島美紀

文化がある、こんな場所がある、こんな人たちがいる、と多くの人に届けること。徳島特有のこの文化を、徳島の人たちが理解し、みんなで盛り立てていくことができるようになることを願いながら、これからもカメラとマイクを持っていろいろなところに取材に出かけようと思つています。



『第二回小屋掛け公演をふりかえつて』

青年座 玉井啓行

今年で二回目となった徳島城内人形浄瑠璃小屋掛け公演ですが、今回の目玉は何と言っても水上舞台でしょう。建築士の森兼さんの提案で史上初の試みが出来ました。普段はあまり交流のない人形浄瑠璃の市内七座と建築士の方と一緒に舞台／公演をつくりつていくのはスリリングな楽しい作業です。

まだまだ人形浄瑠璃の認知度は低い（県民でも生で見たことが無いという人が多い）と思いますが、こういう小屋掛け舞台で普段慣れ親しんでる公園でのライブということに大きな意味があると思います。僕も小学生の頃、夏休みには毎日遊んでた馴染みの場所ですし、散歩がてら「あら、こんなところでも人形浄瑠璃やつてる！」という身近な存在になりたいですね。



劇場での舞台には無い、自然のロケーションの中で、農村舞台にも共通する昔ながらの風景、大人も子供も一緒に弁当を広げて歓談しながらそこに居る。また、昼間の明るい緑の中もいいですが、夜、かがり火をともした水面に映える舞台・・・『芝居見物』という日本人の郷愁をくすぐる魅力があります。ただ、見る側にとって、浄瑠璃言葉が分かりにくいという点が大きなネックだと思います。

現代語訳や他ジャンルとのコラボ、音楽・照明効果など演出も工夫して、もっと分かりやすく、楽しい『ライブ』をどんどんやりますよ。

阿波の農村舞台に出会つて

熟塾代表 原田彰子

秋口になると、奈良から徳島に嫁いだ友人が季節の香り「すだち」を届けてくれる。電話でお礼を伝えるたびに、彼女の近況報告に、人形浄瑠璃や「寄井座」という言葉を聞くことになる。天狗久の県の重要文化財の頭についての話を聞き、とても興味を持っていた。私自身〇Lをしながら、関西の文化を学ぼうと十年前に旗揚げした「熟塾」という会を主催しており、大阪の芸能として「文楽」を鑑賞すると共に、大夫や三味線、人形遣いに、衣装、床山、小道具についてのお話を伺うワークショップも行ってきた。平成十五年十月には、旗揚げ十周年として、大阪中の島の中央公会堂で「夢からはじまる 船場の夢 大阪の夢」で熟塾名付け親の作家の藤本義一氏の講演に、人間国宝の竹本住大夫師匠の『思い出語り』では郷土大阪や文楽への思いを語っていた。ただ機会も得ていた。

大阪には国立文楽劇場という舞台がある。舞台には表と裏がある。表舞台に花を咲かすには裏舞台での演者を始め様々な人々の丹精籠めた日々の積みかさねがある。表舞台に咲く花は、幕が開いている間だけの刹那的な命だが、その花の輝きは観客の心に咲き続け、各地の伝統文化は何代にも渡って受け継がれてきた。徳島に嫁いだ友人の縁で、熟塾で今年九月二十五日二十六日に、阿波の人形浄瑠璃鑑賞とすだち狩りバスツアーを企画。神山町の天王神社の小野さくら野舞台に辿り着いた。今回は襖絵を拝見する機会を得た。襖絵はカラクリ仕掛けで人力で



回転させたり引き抜いたり一瞬で舞台展開できるとのこと。映画やテレビがない時代の人々をさぞ驚かせましたことだろうと、初めてみる襖カラクリや太夫座も敷設された徳島独特の農村舞台に感動。寄井座の座員から、天狗久作のお鶴の人形を手渡された時、歴代の村人の思いも手にしたかのようにずしりと重たく感じられた。村人と苦楽を共にした人形だけが持つ不思議な迫力。演じられる度に、人形たちは歴代の村人の思いと共に蘇生する。この人形たちが記憶する舞台こそが、農村舞台であろう。阿波農村舞台の会が昨年発足。郷土徳島の眠れる遺産を現在に蘇らせる活動に深く感銘を受けた。この活動が、金丸座、内子座に並び阿波の農村舞台・鎮守の森の舞台として全国から脚光を浴びるものと期待している。



▲前列左から5番目が著者